

松山鏡

楠山正雄

一

むかし越後国えちごのくに松まつ山家の片田舎かたいなかに、おとうさんとおかさんと娘むすめと、おやこ三人にん住すんでいるうちがありました。

ある時ときおとうさんは、よんどころない用事ようじが出来できて、京都きょうとへ上のぼることになりました。昔むかしのことで、越後えちごから都みやこへ上のぼるといえば、幾日いくにちも、幾日いくにちも旅たびを重かさねて、いくつとなく山坂やまさかを越こえて行いかなければなりません。ですから立たって行くおとうさんも、あとに残のこるおかさんも心配しんばいではありません。それで支度したくが出来できて、これから立たとうというとき、おとうさんはおかあさんに、

「しっかり留守するすを頼たのむよ。それから子供こどもに気きをつけてね。」

といいました。おかあさんも、

「大丈夫だいじょうぶ、しっかりお留守居るすいをいたしますから、気きをつけて、ぶじに早はやくお帰かえりなさいまし。」
といいました。

その中で娘むすめはまだ子供こどもでしたから、ついそこらへ出かけて、じきにおとうさんが帰かえって来くるもののように思おもって、悲かなしそうな顔かおもしずに、

「おとうさん、おとなしくお留守番るすばんをしますから、おみやげを買かってきて下くださいな。」

といいました。おとうさんは笑わらいながら、

「よしよし。その代かわり、おとなしく、おかあさんのいうことを聴きくのだよ。」

といいました。

おとうさんが立たって行いってしまおうと、うちの中は急きゆうに寂さびしくなりました。はじめの一日にちや二日ふつかは、娘むすめもおかあ

さんのお仕事しごとをしているそばでおとなしく遊あそんでおりましたが、三日みっか四日よっかとなると、そろそろおとうさんがこいしくなりました。

「おとうさん、いつお帰かえりになるのでしょうかね。」

「まだ、たと寝ねなければお帰かえりにはなりませんよ。」

「おかあさん、京都きょうとうってそんなに遠とおい所ところなの。」

「ええ、ええ、もうこれから百里りの余よもあって、行くだけに十日とおかあまりかかって、帰かえりにもやはりそれだけかかるのですからね。」

「まあ、ずいぶん待まちどおしいのね。おとうさん、どんなおみやげを買かっていらっしゃるでしょう。」

「それはきつといいものですよ。樂たのしみにして待まっておいでなさい。」

そんなことをいいいい、毎日まいにち暮くらしているうちに、十日とおかたち、二十日はつかたち、もうかれこれ一月ひとつきあまりの月日つきひがたちました。

「もうたんと、ずいぶん飽あきるほど寝ねたのに、まだおとうさんはお帰かえりにならないの。」

と、娘むすめは待まち切れなくなつて、悲かなしそうにいいました。

おかあさんは指ゆびを折おつて日を数かぞえながら、

「ああ、もうそろそろお帰かえりになる時分じぶんですよ。いつお帰かえりになるか知しれないから、今いまのうちにおへやおそうじをして、そこらをきれいにしておきましょう。」

こういつて散ちらかったおへやの中を片かたづけはじめますと、娘むすめも小さなほうきを持って、お庭にわをはいたりしました。するとその日の夕方ゆうがた、おとうさんは荷物にもつをしょつて、

「ああ、疲つかれた、疲つかれた。」

といいながら、帰かえつて来きました。その声こえを聞きくと、娘むすめはあわててとび出だして来きて、

「おとうさん、お帰かえりなさい。」

といいました。おかあさんもうれしそうに、

「まあ、お早はやお帰かえりでしたね。」

といいながら、背中せなかの荷物にもつを手伝つたつて下おろしました。娘むすめはきつとこの中にいいおみやげが入はいつているのだろうと思おもつて、にこにこしながら、おかあさんのお手伝つたつていをして、荷物にもつを奥おくまで運はこんで行きました。そのあとから、おとうさんは脚絆きやはんのほこりをはたきながら、

「ずいぶん寂さびしかったろう。べつに変かわつたことはなかつたか。」

と、いいいい奥おくへ通とりました。

おとうさんはやつと座すわって、お茶ちゃを一杯ばいのも暇ひまもないうちに、包つつみの中から細長ほそながい箱はこを出だして、にこにこしながら、

「さあ、お約束やくそくのおみやげだよ。」

と、いって、娘むすめに渡わたしました。娘むすめは急きゆうにとろけそうな顔かおになって、

「おとうさん、ありがとう。」

と、いいながら、箱はこをあけますと、中からかわいらしいお人形にんぎょうさんやおもちが、たんと出てきました。娘むすめはだいじそうにそれを抱かかえて、

「うれしい、うれしい。」

と、いって、はね回まわっていました。するとおとうさんは、また一つ平ひらたい箱はこを出だして、

「これはお前まえのおみやげだ。」

と、いって、おかあさんに渡わたしました。おかあさんも、

「おや、それはどうも。」

と、いいながら、開あけてみますと、中には金かねでこしらえた、まるい平ひらたいものが入はっていました。

おかあさんはそれが何なんにするものか分わからないので、うらを返かえしたり、おもてを見みたり、ふしぎそうな顔かおばかりしていますので、おとうさんは笑わらい出だして、

「お前まえ、それは鏡かがみと、いって、都みやこへ行かなければ無ないものだよ。ほら、こうして見みてごらん、顔かおがうつるから。」

と、いって、鏡かがみのおもてをおかあさんの顔かおにさし向むけました。おかあさんはその時とき鏡かがみの上にうつつた自分じぶんの顔かおをしげしげとながめて、

「まあ、まあ。」

と、いってました。

二

それから幾年いくねんかたちました。娘むすめもだんだん大きくなりました。ちょうど十五になった時とき、おかあさんはふと病氣びょうきになって、どっと寝込ねこんでしまいました。

おとうさんは心配しんばいして、お医者いしやにみてもらいましたが、なかなかよくなりません。娘むすめは夜よるも昼ひるもおかあさんのまくら元もとにつきつきりで、ろくろく眠むる暇ひまもなく、一生懸命いっしょうけんめいにかんびようしました。病気がようきはだんだん重おもるばかりで、もう今日きょう明日あすがむずかしいというまできになりました。

その夕方ゆうがた、おかあさんは娘むすめをそばに呼よび寄よせて、やせこけた手で、娘むすめの手をじつと握にぎりながら、「長ながい間あいだ、お前まえも親切しんせつに世話せわをしておくれたが、わたしはもう長ながいことはありません。わたしが亡なくなったら、お前まえ、わたしの代かわりになって、おとうさんをだいいじにして上あげて下ください。」

といいました。娘むすめは何なんということもできなくて、目にいっばい涙なみだをためたまま、うつむいていました。その時ときおかあさんはまくらの下から鏡かがみを出出して、

「これはいつぞやおとうさんから頂いたいて、だいいじにしている鏡かがみです。この中にはわたしの魂たましいが込こめてあるのだから、この後のちいつでもおかあさんの顔かおが見みたくなったら、出だしてごらんなさい。」
といて鏡かがみを渡わたしました。

それから間まもなく、おかあさんはとうとう息いきを引ひき取とりました。あとに取とり残のこされた娘むすめは、悲かなしい心ころをおさえて、おとうさんの手助でだすけをして、おとむらいの世話せわをまめまめしくしました。

おとむらいがすんでしまうと、急きゆうにうちの中がひっそりして、じっとしていると、寂さびさがこみ上あげてくるようでした。娘むすめはたまらなくなつて、

「ああ、おかあさんに会あいたい。」

と独ひとり言ごとをいいましたが、ふとあの時ときおかあさんにいわれたことを思おもい出だして、鏡かがみを出だしてみました。
「ほんとうにおかあさんが会あいに来きて下くださいかしら。」

娘むすめはこういいながら、鏡かがみの中をのぞきました。するとどうでしょう、鏡かがみの向むこうにはおかあさんが、それはずっと若わかいい美うつくしい顔かおで、にっこり笑わらっていらっしやいました。娘むすめはぼうっとしたようになって、

「あら、おかあさん。」

と呼よびかけました。そしていつまでもいつまでも、顔かおを鏡かがみに押おしつけてのぞき込こんでいました。

三

その後のちおとうさんは人にすすめられて、二度どめのおかあさんをもりました。

おとうさんは娘むすめに、

「こんどのおかあさんもいいおかあさんだから、亡くなったおかあさんと同おなじように、だいじにして、いうことを聴きくのだよ。」
といました。

娘むすめはおとなしくおとうさんのいうことを聴きいて、

「おかあさん、おかあさん。」

といて慕っていますと、こんどのおかあさんも、先せんのおかあさんのように、娘むすめをよくかわいがりました。おとうさんはそれを見みて、よろこんでいました。

それでも娘むすめはやはり時々ときどき、先せんのおかあさんがこいしくなりました。そういう時とき、いつもそつと一間ひとまに入はいて、
鏡かがみを出だしてのぞきますと、鏡かがみの中にはそのたんびにおかあさんが現あらわれて、

「おや、お前まえ、おかあさんはこのとおり達者たっしやですよ。」

というように、にっこり笑わらいかけました。

こんどのおかあさんは、時々ときどき娘むすめが悲かなしそうな顔かおをしているのを見みつけて心配しんぱいしました。そしてそういう時とき、いつも一間ひとまに入はいて、いつまでも出てこないのを知して、よけい心配しんぱいになりました。そう思おもって娘むすめに聴きいても、

「いいえ、何なんでもありません。」

と答こたえるだけでした。でもおかあさんは、何なんだか娘むすめが自分じぶんにかくしていることがあるように疑うたぐって、だんだん娘むすめがにくらしくなりました。それである時ときおとうさんにその話はなしをしました。おとうさんもふしぎがって、

「よしよし、こんどおれが見みてやろう。」

といて、ある日そつと娘むすめの後あとから一間ひとまに入はいて行きました。そして娘むすめが一心いっしんに鏡かがみの中に見入み入っているうしろから、出だし抜ぬけに、

「お前まえ、何なにをしている。」

と声こえをかけました。娘むすめはびっくりして、思おもわずふるえました。そして真まっ赤かな顔かおをしながら、あわてて鏡かがみをかくしました。おとうさんはふきげんな顔かおをして、

「何なんだ、かくしたものは。出だしてお見みせ。」

といました。娘むすめは困こまったような顔かおをして、こわごわ鏡かがみを出だしました。おとうさんはそれを見みて、
「何なんだ。これはいつか死しんだおかあさんにわたしの買かってやった鏡かがみじゃないか。どうしてこんなものをながめているのだ。」

といました。

すると娘むすめは、こうしておかあさんにお目にかかっているのだといました。そしておかあさんは死んでも、やはりこの鏡かがみの中にいらして、いつでも会いたい時ときには、これを見れば会えるとあって、この鏡かがみをおかあさんが下くたさったのだと話はなしました。おかあさんはいよいよふしぎに思おもって、

「どれ、お見みせ。」

といいながら、娘むすめのうしろからのぞきますと、そこには若わかい時ときのおかあさんそっくりの娘むすめの顔かおがうつりました。

「ああ、それはお前まえの姿すがただよ。お前まえは小ちいさい時ときからおかあさんによく似ていたから、おかあさんはちっとでもお前まえの心こころを慰なぐさめるために、そうおっしゃったのだ。お前まえは自分じぶんの姿すがたをおかあさんだと思おもって、これまでながめてよろこんでいたのだよ。」

こうおかあさんはいいながら、しおらしい娘むすめの心こころがかわいそうになりました。

するとその時ときまで次つぎの間まで様子ようすを見みていた、こんどのおかあさんが入はいつて来きて、娘むすめの手を固かたく握にぎりしめながら、

「これですっかり分かりました。何なんというやさしい心こころでしょう。それを疑うたぐったのはすまなかつた。」

といいながら、涙なみだをこぼしました。娘むすめはうつむきながら、小声こごえで、

「おとうさんにも、おかあさんにも、よけいな御心配ごしんぱいをかけてすみませんでした。」
といました。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月19日作成

青空文庫作成ファイル